九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

残薬確認と処方調整による医療費削減の評価および服薬アドヒアランス不良要因の探索 : 節薬バッグ運動を介して

小柳, 香織

https://hdl.handle.net/2324/1785381

出版情報：九州大学, 2016, 博士（臨床薬学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏　　名	小柳香織
論　文　名	残薬確認と処方調整による医療費削減の評価および 服薬アドヒアランス不良要因の探索 ―節薬バッグ運動を介して―
論文調査委員	主　査　九州大学　　准教授　　島添　隆雄 副　査　福岡大学　　教授　　神村　英利 副　査　九州大学　　准教授　　松永　直哉 副　査　九州大学　　准教授　　窪田　敏夫

論文審査の結果の要旨

日本の医療保険制度は安心かつ優れたシステムであるが、その一方で、医療費の増大をはじめとする様々な問題を抱えている。保険薬局は、安全かつ適正な薬物療法の実施に併せて、後発医薬品の使用促進や残薬の確認・解消といった医療費の適正化にかかる観点での積極的な関与も求められている。本研究では、薬局薬剤師による、残薬確認と処方調整、服薬アドヒアランス向上の取組みである「節薬バッグ運動」を通し、これらの業務が医療費の削減および服薬アドヒアランスの向上に寄与するのか調査し評価を行った。

第 1 章では、残薬確認と処方調整による、医療費削減への寄与を明らかとする目的で、成人外来患者が保持する残薬の現状を調査し、以下の知見を得た。

1. 成人外来患者が保持する残薬の約 84% が処方調整により削減され、残薬確認と処方調整が医療費削減に有効であることを実証した。この結果より、年間医療費削減可能額を約 3,300 億円と試算した。
2. 薬剤費負担割合により薬剤の価値や重要性に対する意識の差が生じている可能性が示唆された。また、残薬として生活習慣病用薬が多く見られ、処方医の意図する薬物療法が実現されていない可能性が示唆された。

第 2 章では、残薬確認と処方調整による削減率（金額・数量）を算出し、医療費削減への寄与、また薬効分類別の服薬アドヒアランスを評価し、以下の知見を得た。

1. 患者 1 人あたり処方金額の 15.6%（中央値）が削減され、残薬確認と処方調整が医療費削減に寄与することを実証した。
2. 処方削減率（PRR）を評価指標とし、血圧降下剤と比較して、下剤・浣腸剤、精神神経用剤、高脂血症用剤、血液体液用剤、など 7 薬効分類が、服薬アドヒアランス不良であった。漫然投与や過量処方、また必要な服薬率が維持されていない可能性が示唆された。生活習慣病用

剤である高脂血症用剤と血液体液用剤に関して、十分な服薬アドヒアランスが維持されていない可能性が示唆された。

第 3 章では、PRR を評価指標とし、服薬アドヒアランス不良に関連した患者や処方、また経口糖尿病薬の要因について評価し、以下の知見を得た。

1. 薬剤費自己負担がない、また併用薬剤数がより少数である患者は服薬アドヒアランス不良であった。患者負担金のなさは、薬剤の価値や重要性に対する意識の低下を招く危険性があること、また、併用薬剤数が少ない患者は服薬アドヒアランスが良好であると安易に想定すべきではないことが示唆された。他方、一包化実施はアドヒアランス不良の危険性を低減させ、多剤併用時、服薬アドヒアランスを強化する効果的手法であると推察された。
2. 経口糖尿病薬に関し、服用回数が多い、また食前服用である薬剤、薬効クラスでは、αGI と BG が SU と比較して服薬アドヒアランス不良であった。薬剤の特徴に留意した服薬状況の確認が必要であると考える。
3. PRR は、海外では服薬アドヒアランスの標準的な指標ではないが、日本において、患者の服薬状況を評価するより現実に即した指標として活用可能と考える。

本研究は、薬局薬剤師による残薬確認と処方調整が、医療費削減に寄与することを明らかにした。また残薬発生の状況から、患者の服薬アドヒアランスを定量的に評価し、いくつかの特徴的な傾向を見出した。

残薬確認と処方調整は、医療費の削減のみならず、患者の服薬状況を把握し、処方の適正化および服薬アドヒアランス改善に向けた有効な取組みを見出す契機となる。患者と一緒に残薬を確認し、処方医に疑義照会を行うことで、患者と処方医、薬剤師間で服薬アドヒアランスに関する共通認識が得られれば、処方意図や薬剤適正使用に配慮した上で、処方薬の整理、配合剤への変更、剤形変更、服用回数の少ない薬剤の提案など、患者の服薬状況の改善を目指したよりよい連携を構築できる。治療の主体である患者を中心とした連携を密にし、患者の薬物療法に対する意識と服薬アドヒアランスを高め、その結果として残薬の発生を防ぎ、無駄の少ない最適な薬物療法を実現できると考える。また、この様なエビデンスの蓄積は、医療の質を向上させるとともに、薬剤師職能の評価につながるものと考える。

本論文は、上記の内容を記述しており、「節薬バッグ運動（Setsuyaku Bag Campaign）」の名を日本のみならず海外にも知らしめた。本研究の成果は、厚労省も高く評価し、

本年度の診療報酬改定にも繋がった。すなわち、残薬調整のためにバッグを作ることで保険点数に加算されることが決定し、全国の薬剤師会にバッグを作ることを推奨している。また、その参考資料として本運動の内容がホームページにも取り上げられるに至った。このように、本論文は、薬剤師による臨床研究の重要性を初めて認識させたものであり、博士（臨床薬学）の学位に値すると認める。